

## 油彩

(テンペラ併用)

ガラスの静物を描く①

## 二浦明範の静物画講座

みづらあきのり 1953秋田 東京芸芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館  
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ヒエンナーレ、日本の絵画新世代展、両岸の眼現  
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在('96  
 '97) 春陽会会員

今回は、ガラスを中心に静物を組み立ててみます。ガラスは透明ですから、その向こう側の光を透過します。しかも、

表面が滑らかなので、角度によって周りの光を反射します。さらに、透明とはいえ、ガラス自体も色を持っていきます。すなわち、ガラス

には3種類の光が同時に含まれていることとなります。このように複雑な光の交錯が、ガラスを描くことの面白さではないでしょうか。モチーフとしては、台そのものまでガラスにしてみます。さらに、グラス、皿など。ガラスだけでは

硬くなるので、対比に柔らかい花と布を組み合わせます。

## ■支持体・プレパレーション

支持体には、6号の表面シナベニヤ・パネルを使いますが、今回は、この上に寒冷紗を貼ってみます。これまでの制作では、和紙の貼り方を紹介してきましたが、この寒冷紗も強度を増すためのものです。

寒冷紗は、若い世代にはあまり馴染みがないでしょうが、かつては夏の風物詩であった、「蚊帳」の素材です。最近では、園芸材料店で植物の日よけの材料として市販されています。画材店なら、版画コーナーで、エッチングのインクふき取り用の布を買い求めます。これが寒冷紗です(図1)。

1 今回のパネルはメーカーに注文して作ってもらいましたが、のこぎりと木工用ボンドさえあれば簡単に手作りもできます(次の機会に詳細を)。また、キ

ヤンバスの木枠を利用し、その裏にシナベニヤを貼り付けても良いでしょう。

このままでも使えますが、私は、パネルのエッジを45度に削ります(図2)。これは、下地塗料を刷毛塗りする時、角に塗料が溜まりやすいからです。このように削っておくと、塗料は側面の方へ流れて溜まりません。

2 裏に、データ・ラベルを貼ります。データ・ラベルは、どのような書式でも良いのですが、私は(表1)のような物を使っています。これは、どのような材料で描いたかがわかるようにしたもので、自分自身のための覚書なのですが、万が一の修復のためでもあります。

まず、水1000ccに対し、膠70g(7%と表示)の膠液を塗ります。その上にラベルの端を合わせ、上からほぼ倍に薄めた膠液(3%)を空気を逃すようにして塗っていきます。その

時、同時に紙の皺を伸ばすように、ゆっくりと貼り付けていきます(図3)。

濃い膠水は紙に浸透し難く、貼り付けた後で紙が伸びてしまい、結果的に皺ができてしまいます。それに対し、薄い膠水は簡単に浸透して紙が伸び切るため、皺がでず、染み込んだ膠液は下の膠と結合します。

最後に、余分な膠水を、硬く絞った濡れ雑巾で軽く叩いて吸い取ります。

3 7%の膠水を、前膠として塗ります(図4)。この時、裏の四隅にプッシュピンを打っておきます。台との間に隙間を作ることで、液垂れでの接着を防ぎ、さらに通気が良くなり、裏からの乾燥も手伝います。

さらに、側面にも塗布しておきます。

4 前膠が乾いたら、寒冷紗を置き、上から同じ膠水を中央から放射状に塗っていきます(図

作品名		制作年月	
制作者		大きさ	
支持体		備考	
プレパレーション			
絵具層			
保護層			

(表1)データ・ラベル



(図1)パネル作りの用具と材料…上左から、シナベニヤ・パネル、ウサギ膠、白亜水刷毛、秘密兵器の靴ブラシ、寒冷紗。



〔図2〕パネルの角にヤスリをかける。



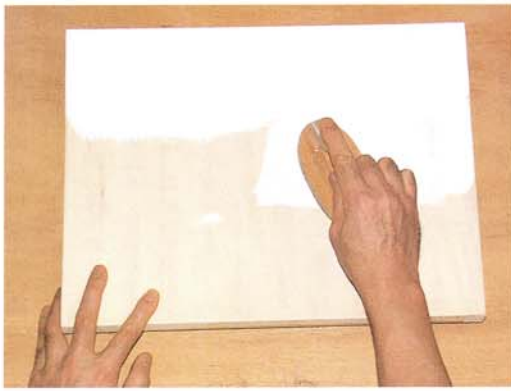
〔図3〕裏にデータ・ラベルを貼る。



〔図4〕前膠を塗る。



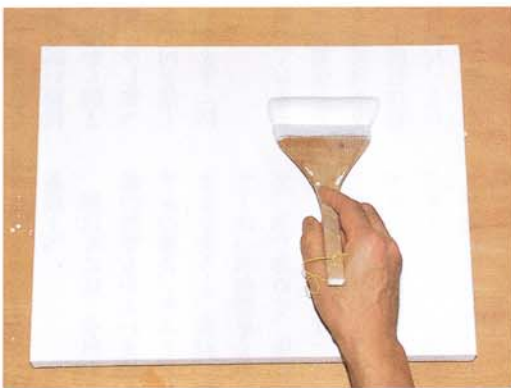
〔図5〕寒冷紗を貼る。



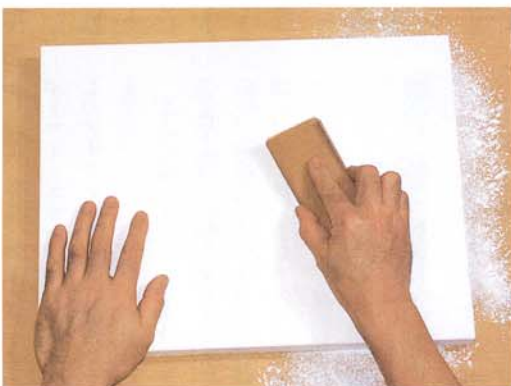
〔図6〕1回目の下地塗料。



〔図7〕パネルの側面にも塗布。



〔図8〕2回目の下地塗料。



〔図9〕紙ヤスリで磨く。



(図10) ビスタ(左上)。これを水で溶いてインクにする。その下は、ヤマシギの一種の羽で、筆として使用。付け根の部分から採取し、1羽から2枚しか取れない貴重品。

5) 和紙の時は、板と和紙の間に空気が残らないように注意しましたが、今回の寒冷紗は、とても目が粗いため、空気が溜まることはなく、たいへん楽に張り合わせることが出来ます。

ひとつ注意する点は、寒冷紗はのりで織り目を固定してあるので、水分を与えると、織り目が酷く不安定になってしまうことです。そのため、貼り直しが利きませんので、しっかりと位置合わせしてから膠を引きます。

寒冷紗の余った部分は、側面

に折り込み、同様に膠水で貼り付けます。乾燥後にカッターナイフや紙ヤスリで整えると、きれいに仕上がります。

5 同じ7%の膠水に、白垂をひたひたまで振り入れたものを、下地塗料とします。

下地塗料を塗る時の注意は、どんな支持体でも同じことなのですが、1回目の時に塗り残しやムラや気泡が出来てしまうと、2回目以降では直せないということ。寒冷紗は特に気泡が出来やすいので、写真のような

「秘密兵器」を使って擦り込むようにします。一度に広い面積を塗ってからは、端から固まつてしまいますので、少し塗つてすぐに、靴ブラシで円を描くように擦り込んでいきます(図6)。

6 パネル側面にも塗っておきます(図7)。これは角の補強のためですが、毎回塗る必要はありません。たとえば、1回目は右2回目は上、3回目は左、というように塗っていくと、塗つた回数、分からなくなるといふことの対策にもなります。

7 2回目は直行方向に塗ります(図8)。最初の時、しっかりと塗り残しや気泡を取り除いたものは、2回目以降は、「秘密兵器」は必要ありません。後は、これを縦横交互に、合計6回塗りします。

8 よく乾燥させ、サンドペーパー#240で仕上げます。木片に巻き付けてヤスリかけすると、均等に平に仕上がります(図9)。最後に、硬く絞った濡れ雑巾で、軽く拭きます。

## ■アンダー・ドロウイング

いつもと同じように、デッサンしたものをトレースし、墨でアン

ダー・ドロウイングします(制作過程1)。

墨以外には、水彩やアクリル絵具の黒でもかまいませんが、アクリルの場合、チューブから出したままを使うと、表面に皮膜ができて下地の吸収性を止めてしまいううにして描きます。

古い時代には、この墨のほかに、ブラックチョーク(注1)や木炭ピスタ(注2・図10)というインクが使われました。木炭などは定着液を使わず、上から水を塗って浸透させたものと思われま

## ■アイソレーション・インプリミトゥーラ

アイソレーションとは絶縁層と訳していますが、実際は、完全に絶縁することではなく、白垂地の吸収性を調節することなのです。

古来行われてきたのは、次のような方法です。

リンシードオイルなどの乾性油の入った壺の口に、掌を当てます。それを逆さにして、掌に乾性油を付けます。それを画面に擦りつけていくのです。

今日的には、乾性油を揮発性油で倍に薄めて刷毛で塗布する他、他の材料として、揮発溶剤で溶か

した樹脂、膠水、アクリリック・ポリマー・エマルジョンなどが、このアイソレーションに使用できます。

ここでは、インプリミトゥーラ(有色下地)での制作をしていますので、油絵具とメデイウムの混合物が、アイソレーションの役割をすることになります。今回は、ライトレッドにします(制作過程2)。

## ■テンペラ・油彩での制作

1 テンペラ白(チタニウム・ホワイト)で浮き出します(制作過程3)。

2 ライトレッドの赤味を中和させるため、寒色(ヴァイリジアン)を全体に塗布します(制作過程4)。

3 再度、テンペラ白でモデリングを行います(制作過程5、6)。背景はこの後、グレイズしていきますので、テンペラの吸収性を止めるため、油彩シルバー・ホワイトに油メデイウムを加えて塗布しておきます(制作過程7)。続きは次回に。

(注1) 炭素を含む黒色の粘土。

(注2) 木材を焼いてできる煤から作る、タール分の多い顔料。



(制作過程5)  
テンペラ白で浮き出し。



(制作過程6)  
テンペラ白でスタンピング。



(制作過程7)  
油彩シルバー・ホワイトを背景部分に塗布。



(制作過程1)  
アンダー・ドロウイング



(制作過程2)  
アイソレーション・インプリミトゥーラを油彩ライトレッドで行う。



(制作過程3)  
テンペラ白での浮き出し。



(制作過程4)  
油彩ウイリジアンを塗布